刀語番外編

善悪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
刀語番外編

【Ｎコード】
Ｎ８８９７Ｎ

【作者名】
善悪

【あらすじ】
伝説の刀鍛冶四季崎記紀のつくりし完成形変体刀を蒐集することになった奇策士とがめと虚刀流七代目当主鑢七花は旅の途中、盗まれた変体刀蒐集の命も下った。
無事に集めることができるのか！！
その刀の所有者とはいったい！！

壊刀・釘　序章

壊刀・釘

完成形変体刀十二本の蒐集のために二人の男女が農村を歩いていた。

一人は豪華絢爛の十二単重ね着した美貌の女。

尾張幕府家鳴将軍家直轄預奉所軍所総監督の奇策士とがめ

男はと言うと、かなりの長身にボサボサ頭の長髪。

上半身裸で下半身は黒い袴をはいている。

この男、無刀の流派、かの虚刀流七代目当主、鑢七花だ

かの旧将軍がなし得なかった完成形変体刀を絶刀・『鉋』斬刀・『鈍』千刀『金殺』の三本を蒐集していた。

「とがめも大変だよな。」

七花がそう呟いた。

「なにがだ？七花よ？」

とがめは答える。

「だってよ。俺達の目的は完成形変体刀だろ？なのにこんな命令がくるなんてな。」

「…うむ。まさか私もこんなことになるなんて…」

それはつい千刀を蒐集して出雲を出ようとしたときだった。

尾張から使いのものが来てあることを告げた。

それは尾張城の倉庫に保管してあった変体刀が五本盗まれたことだった。

「完成形変体刀も集めながら変体刀も集めるなんて骨が折れるぜ。」

「まったくだ。とんだ盗人だよ。」

農村を歩くことをやめない。

中には物珍しい目で見る目で見る者もいる。

「話によるとこの家なのだがな…」

「そうなのか？」

二人は一軒の家についた。

壊刀・釘　真庭魔鴉（前書き）

「なぁとがめ。この家に変体刀を盗んだ奴が居るんだよな？」

七花は確認をとるようにとがめに聞いた。

「うむ、そのようだな。」

「どうする……」

とがめは七花の問いに答えることなく、その一軒の家に入り込んだ。

「ごめん！！」

と言って

「おい、とがめ」

一瞬焦りを見せた七花だったが、とがめも驚いていた。

「…どういうことだ？」

「どうしたんだよ。」

続いて七花も中に入る。

「……誰も…いない…」

「…？どう言うことだ？」

二人はこの家に入り悩み込んでしまった。

■　■

山の中を走る二つの影があった。

と言っても、一人はもはや走るのを最初から諦めてゆっくりと歩いている。

もう一人は木から木へ飛び移って行動していたので走ってはいなかった。

二人はこの山の拓けた所についた。

木から木へ移動していた者はゆっくりと歩いていた者と同時に着くように計算してきたのである

「……お前が持っているその刀…私がもらい受ける。」

先に喋ったのは木から木へ移動していた者だった。

肩から先を切り落とした異様な黒いしのび装束。

その代わりか、全身に鎖を巻いている。

そしてそのしのびの手には一本の刀が握られていた。

言うまでもない。この男…暗殺専門のしのび集団、真庭忍軍のしのびだった。

「いやだっちゃよ。人が苦労して盗んだ変体刀を誰が渡すものっちゃか。」

独特な喋り方をするこの男
白の着流しに麦で出来た帽子をかぶっており、
首には手拭いをかけている
手には棒状の、長く、釘が無数に突き刺さった鉄塊を持っていた。
「で、お前は誰っちゃか？」
軽く鼻で笑いしのび装束の男は答える。
「真庭忍軍十二頭領が一人。真庭白鷺様の部下。真庭魔鴉」
そう真庭魔鴉は言った。
「お前は何者だ？所有者よ」
それに対し白の男は静かにこう名乗った。
「零崎軋識」
その名に、零崎と言う姓に魔鴉は顔を急に険しい表情変えた。
「零崎…だと…」
「あー、その手の驚きは飽きてるから早くかかってこいっちゃ。」
生唾を飲む魔鴉……

そして、魔鴉は動いた。
持っていた刀を抜き構え…
投げた！！
「！！」
思わず軋識は無理にかわしてしまう。
それが魔鴉の狙いだった。
魔鴉は脚力だけで高く飛び上がった。
「忍法　羽根落とし」
魔鴉は手に持っていた手裏剣を真下にいる軋識に向かって投げつけだ。
右に四枚　左に四枚　計八枚を投げつけだ。
「『不運の魔鴉』参る。」
それに対して軋識はと言うと八枚の手裏剣の内すべてをかわした。
大胆に大きく避けることによって。
手裏剣の速さは重力の関係でかなり速かったが軋識は読んでいたようにかわす。
「あらら、もうお前の負けっちゃ。」
軋識は腰を落とし膝を軽く曲げ脇しめ棒状の鉄塊を高く構えた。落下する魔鴉に半身の形を見せる。

「畜生！！こんな負け方…！！」

「望んでないっちゃよね」

そして、魔鴉が地面に足をつく直前その釘の突き刺さった鉄塊を振り抜いた。

「愚神礼賛（ぐしんれいさん）」

魔鴉の首の骨をへし折った。

そのとき、その音はその場に響いた。

壊刀・釘　真庭魔鴉

壊刀・釘

完成形変体刀十二本の蒐集のために二人の男女が農村を歩いていた。

一人は豪華絢爛の十二単重ね着した美貌の女。

尾張幕府家鳴将軍家直轄預奉所軍所総監督の奇策士とがめ

男はと言うと、かなりの長身にボサボサ頭の長髪。

上半身裸で下半身は黒い袴をはいている。

この男、無刀の流派、かの虚刀流七代目当主、鑢七花だ

かの旧将軍がなし得なかった完成形変体刀を絶刀・『鉋』斬刀・『鈍』千刀『金殺』の三本を蒐集していた。

「とがめも大変だよな。」

七花がそう呟いた。

「なにがだ？七花よ？」

とがめは答える。

「だってよ。俺達の目的は完成形変体刀だろ？なのにこんな命令がくるなんてな。」

「…うむ。まさか私もこんなことになるなんて…」

それはつい千刀を蒐集して出雲を出ようとしたときだった。

尾張から使いのものが来てあることを告げた。

それは尾張城の倉庫に保管してあった変体刀が五本盗まれたことだった。

「完成形変体刀も集めながら変体刀も集めるなんて骨が折れるぜ。」

「まったくだ。とんだ盗人だよ。」

農村を歩くことをやめない。

中には物珍しい目で見る目で見る者もいる。

「話によるとこの家なのだがな…」

「そうなのか？」

二人は一軒の家についた。

壊刀・釘　竹取山村（前書き）

とがめと七花はその家…つまり零崎軋識の家に居座っていた。

「なぁとがめ。本当にあいつ来るのかよ。」

「安心せい。聞き込みもしただろう。この男はそれなりに人望がある。勝手にこの村を出てはいかぬよ。」

堂々と言った。

すでに軋識を待って随分長くこの家に居座っていると思う

しかし、軋識は来ない。

「なぁ…本当に来るのかよ。面倒臭くてやってらんねえよ。」

「ちぇりお！！」

寝そべった七花の腹部に見事に正拳が入った。

「何すんだよ！」

「たわけ！！これしきのことで弱音を吐く馬鹿がどこにいる。これから本格的に刀集めも大変になって来ると言うのに！！」

「でもな、とがめ」

「うるさい！！次の完成形変体刀所有者はあの日本最強錆白兵だぞ！！もっと気を引き締めろ馬鹿者！！」

二人の口喧嘩（とがめが一方的にだが）も激しくなったところで男が家に入ってきた。

「誰っちゃか？あんたたち」

「！！」

これが零崎軋識とのはじめての対面である。

壊刀・釘　竹取山村

壊刀・釘

完成形変体刀十二本の蒐集のために二人の男女が農村を歩いていた。

一人は豪華絢爛の十二単重ね着した美貌の女。

尾張幕府家鳴将軍家直轄預奉所軍所総監督の奇策士とがめ

男はと言うと、かなりの長身にボサボサ頭の長髪。

上半身裸で下半身は黒い袴をはいている。

この男、無刀の流派、かの虚刀流七代目当主、鑢七花だ

かの旧将軍がなし得なかった完成形変体刀を絶刀・『鉋』斬刀・『鈍』千刀『金殺』の三本を蒐集していた。

「とがめも大変だよな。」

七花がそう呟いた。

「なにがだ？七花よ？」

とがめは答える。

「だってよ。俺達の目的は完成形変体刀だろ？なのにこんな命令がくるなんてな。」

「…うむ。まさか私もこんなことになるなんて…」

それはつい千刀を蒐集して出雲を出ようとしたときだった。

尾張から使いのものが来てあることを告げた。

それは尾張城の倉庫に保管してあった変体刀が五本盗まれたことだった。

「完成形変体刀も集めながら変体刀も集めるなんて骨が折れるぜ。」

「まったくだ。とんだ盗人だよ。」

農村を歩くことをやめない。

中には物珍しい目で見る目で見る者もいる。

「話によるとこの家なのだがな…」

「そうなのか？」

二人は一軒の家についた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8897n/

刀語番外編

2010年10月28日07時58分発行